《特選》

ぼくたちが作り上げる社会

佐和山小学校　五年
西村（にしむら）　心杜（みと）　さん

ぼくは授業でハンセン病の問題について、学習しました。その中で、ハンセン病にかかると、家族と一緒にくらすことができなかったり、その病気にかかった家族もひどい差別を受けたこと、死んでしまって、ほねになった後も家族のもとに返してもらえなかったことを知りました。ぼくはなんてひどいことをしているんだろう。そんな辛い思いをしてきた人々がいたなんて信じられませんでした。授業の中でハンセン病の症状は、手の感覚がなくなり、あつさやつめたさがわからなくなってしまうこと、手や足が変形してしまうことだと知り、「かかりたくない」「怖いな」「イヤだな」と思ってしまいました。何でそう思ってしまうのかなと考えたら、ぼくは、病気について、知らないことが多かったからだと思います。

ハンセン病問題の学習をしている時に、ふと、自分がコロナにかかった時のことを思い出しました。その頃はまだ、コロナにかかると十日間は外出禁止で、一緒に住む家族も外に出ることや、人と関わることができない状況でした。買い物にも行けず、雪の降る中、祖父母が玄関先に食料を置きに来てくれたことをとても覚えています。やっと回復した時、今度は、「学校に行った時、休んでいた理由を友達にどう説明したら良いか」という心配や不安がぼくをおそいました。家族で話し合って、「念のため」という言葉で説明することに決めましたが、今思うと、かくすような言い方をしたことは、正しい選択ではなかったのかもしれないと感じています。なぜなら、十日間かく離されていたから、うつる心配はなかったはずだからです。自分もかかって知れることがとても多かったです。

人は、聞いた情報だけを頼りに、決めつけたものの見方や言い方をしてしまいがちです。実際、今の世の中では、ＳＮＳやエックスなどで、事実ではないことがあっという間に拡散され、それが原因で、心を病んだり、死を考える人も多くいます。正しいかどうか分からない情報を信じてしまうから、差別は起きるのだと思います。差別をしてもだれも得をしないことや、みんななりたくてそうなっていないことを、ぼくなりに知り、呼びかけて、だれもが平等で、差別のない明るい社会を作り上げたいです。

《選評》

ハンセン病問題を取り上げて、それで終わりかと思いきや、自らがコロナに感染した実体験と重ねて、この問題を考えていったことを評価したいと思います。人権問題を考える際には、自分には関係ないと他人ごとに捉えがちですが、この作品では、まさに自分の事として捉えることができました。また、情報が正しいかそうでないかを見極めるリテラシーについても触れられていて、感心しました。

（武部　康広）